レジュメ サンプル

マックス・ヴェーバー著　『社会科学の方法』（1904=1994）　講談社学術文庫
祇園寺信彦・祇園寺則夫訳
1998.05.31　　担当：吉田昌幸

「社会科学的および社会政策的認識の『客観性』」（1904）

問題の提起

◆「社会科学的」研究における客観的な妥当性の必要

・「科学的な認識の標識は、何といってもその認識成果なるものが、真理として『客観的』に妥当するということのうちに見い出されなければならない」。（9）

・「文化〔政治、経済、社会、宗教など意義をもつ〕生活に関する科学の領域において『客観的に妥当な真理』とは一般にいかなる意味で存在するのか」という問いに対する前に、「われわれの学科の研究の方法、また概念の構成の仕方やその妥当性が〔時代とともに〕絶えず変遷すること〔後述〕と〔同時代でも異なる研究者間、ひいては学派間の〕研究方法、また概念の構成の仕方やその妥当性をめぐって〔それぞれ自説を正しいとする〕熾烈な争いとを目のあたりに見て、〔客観的な妥当性とはいかなる意味で存在するのかという〕問いは、避けることはできない。」（9～10）

Ⅰ　経験的知識と価値判断

1　価値判断の科学的批判

・「国家の特定の経済政策的な諸施策について〔その効果の点から〕その価値を判断することが、我々の科学のまず第一の、さしあたりは唯一の目的であった。……しかしその際、『存在するもの、そのもの』の認識と『そうあるべきもの』の認識との原理的な区別はなされずに変化してきたのである。……そうあるべきものは――第一の場合には――不変的に存在するものと一致するのであり、――第二の場合には――不可避的に生成するものと一致するのである。」（13～14）

◎「我々の雑誌は、……以上のような〔経験科学[注1]から当為的な価値判断を生み出さなければならない、とする〕見解を基本的に拒否しなければならない。というのは、我々の意見では実践的行為に対する処方箋をそれらから引き出し得るような拘束的な諸規範や諸理想を発見することは、決して経験科学の課題ではありえないからである。」（15）

⇒経験科学が「テスト可能性」を求められることと、経験科学が行動規範を導出することとは一致しない。

・「価値判断は究極においては特定の理想に基づくものであり、したがってそれは『主観的な』根源をもつものであるから、そのために価値判断は一般に科学的な討論の対象にはならない、ということでは決してない。……問題はむしろ、理想や価値判断についての科学的な批判とはいったいどういうことなのか、またその目的は何なのか、ということなのである。」（16）

・「さて、目的が与えられている場合には、いくつかの手段の〔その目的に対する〕適合性を問う問題が、いかなる場合でも真っ先に科学的な考察の対象になっていく。我々は、思いつかれた一つの目的〔結果〕を達成するのにいかなる手段〔原因〕を用いたら目的に合うのか、それともそれではうまくいかないのかを（われわれの〔因果に関する法則の〕

注1 経験科学（empirical science）：経験科学の目的が、なぜという疑問に対して答えることにあるならば、それは科学的説明と同義である。経験科学は演繹的法則的説明を探求するが、その法則はテスト可能性をもたなければならない。（『社会学辞典』弘文堂）